

「走れメロス」材源考

角 田 旅 人

1

太宰治は、「走れメロス」を「新潮」昭和15（1940）年5月号に発表した。その時、末尾に「(古伝説と、シルレルの詩から。)」と書きつけている。本稿は、この「(古伝説と、シルレルの詩から。)」という注記の元の作品、すなわち太宰が参看したと思われる作品は、どのような形のものであったかについて報告をなし、いささかの考察を試みようとするものである。

2

「走れメロス」と「古伝説と、シルレルの詩」との関係、及び太宰治とフリードリッヒ・シルレルとの対比を考究した論考は少ない。最も新しくかつ詳細に論じた文章に相馬正一<「走れメロス」の背景>（『太宰治』津軽書房所収、昭和54年6月刊¹⁾）があるが、今、この論考が踏まえている先行論文を、本文中と参考文献として掲げるものことから抜き出し、発表日付に従って整理してみると、次のようになる。

- 1 亀井勝一郎『近代文学鑑賞講座・太宰治』の「本文および作品鑑賞」の項、角川書店、昭和34年5月刊。
- 2 長谷川 泉「『走れメロス』鑑賞」、『国語通信』第22号、昭和34年5月発行。
- 3 井上 正蔵「シラーと太宰治」、『新日本文学』第11号、昭和34年11月発行。
- 4 山田 晃「走れメロス」論、『解釈と鑑賞』昭和35年3月号。
- 5 山下 肇「太宰治『走れメロス』」、『国語教育』第56号、昭和38年7

月発行。

- 6 長谷川 泉「走れメロス」,『新編近代名作鑑賞』至文堂所収,昭和42年5月刊。
- 7 小野 正文『『走れメロス』の素材』,「郷土作家研究」第10号,昭和48年12月発行。
- 8 住吉 勇<シラーと太宰治——„Bürgschaft“ と「走れメロス」——>
「ドイツ文学論集」5,日本独文学会中国四国支部編集,三修社,1972(昭47)年3月発行。

相馬氏は、以上の論考を読み、シルレルの詩「Die Bürgschaft」のテキストとして、始め手塚富雄訳「人質(ダーモンとピンチアース)」(筑摩書房版『世界文学大系18・シラー』所載,昭和34年11月刊)を、後にこの訳は途中が省略して訳出されていることに気づき、木村謹治訳「担保」(新関良三編『シラー選集』第一巻所載,富山房,昭和16年2月刊)を選び、木村氏の解説をも参照し、「走れメロス」と対比させつつ論文題目の考察を行っている。

ところでその相馬氏は、論文の「三」をこう書き出している。

それにしても、太宰が原素材として利用したはずのシルレル詩の主役 Damon und Phintias が、どうして Möros und Selinuntius という名に変わったのであろうか。主客の顛倒はあるが「真の知己」の方も<ピチウスとダモン>である。筋の上から言っても明らかにシルレルの「担保」を踏まえているはずなのに、暴君ディオニュースや家僕フィロストラツースの名はそのままにして、主役二人だけを別名にしたのは何故だろうか。

問題は、こういうことになる。まず、シルレルの詩「Die Bürgschaft」を、Hanser 社のシルレル全集第1巻(1973年版)から、その第一連を写してみる。これは「Gedichte」の区分けの中の「Balladen und Romanzen」の項に入っており、副題はない。

Die Bürgschaft

Zu Dionys, dem Tyrannen, schlich
 Damon, den Dolch im Gewande ;
 Ihn schlugen die Häscher in Bande.
 »Was wolltest du mit dem Dolche, sprich!«
 Entgegnet ihm finster der Wüterich.
 »Die Stadt vom Tyrannen befreien!«
 »Das sollst du am Kreuze bereuen!«

次にこの詩の訳であり、相馬氏が考察のテキストとした（「走れメロス」発表後ほぼ10カ月して公刊された）木村訳「担保」の第一連を写す。

暴君ディオニュースのもとに

ダモンが短剣を懐みとこころにして忍び込んだ――

捕吏が彼を縛った。

「そちはこの短剣でどうするつもりぢゃ、言へ！」

陰険な顔付で暴君は彼に向かって叫んだ。

「町を暴君の手から救ふのだ！」

「はりつけ磔はりつけにあってから後悔するな。」

これに対し「走れメロス」の冒頭は次のごとくに始まる。

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

すなわち「走れメロス」では、主人公がダモンからメロスに変っている。さらに詩には「den Freud」（友）としかなく、名は明かされていないのに、「走れメロス」ではセリヌンティウスと名付けされている。それでいて王の名は

「デイオニス」、忠僕の名は「フィロストラトス」（詩ではダモンの忠僕であるが、「走れメロス」ではセリヌンティウスの弟子と変えられている）は、そのまま使われている。これはどういうことなのか、という話である。

3

この問題に最初の判断を示したのは、亀井勝一郎（上記文献1）である。亀井によればこの詩の材料になったのはローマの著述家ヒギヌスの寓話であるという。それに依ると二人の朋友はメロスとゼリヌンティオスであるが、しかし他の著述家に従えば、ダーモンとフィンティアスである。シルレルははじめ、この詩の第一節、第二行の初語を、Möros としたが、後に Damon と改め、同時に表題の下に“Damon und Phintias”を付け加えたという。太宰は主人公の名前などは古伝説に従ったのだろう。>ということになる。上記の先行文献は、7小野論文以外は全て、基本的にはこれと同じ理解に拠っている。8の住吉論文は、ヒギンの「寓話 (Fabel)」に戻り、「担保」と比較し、「走れメロス」と対比考察しつつ三つの作品の連続関係を精密に追究しているが、亀井説の枠組を出ているわけではない。

ただ一つ奇妙なことが木村氏の解説の中にある。相馬氏はその木村解説を引用した上で、そこを次のように推察している。

ここで興味深いのは、ダーモンとピンチアースが登場する訳詩「担保」を解説するのにどういいうわけか訳者の木村謹治がヒューギンの「寓話」に出てくるメロスとセリヌンティウスの名を使っていることである。「担保」の詩では<ダモン>が登場するのに、解説文はすべてメロスになっていてどこにも<ダモン>の名は見当らない。おそらくシルレルの「手記」の中に、「担保」の登場人物を当初原素材である古伝説に即してメロスとセリヌンティウスにするつもりであったことが書かれており、訳者の木村謹治がそのことを念頭に置いて解説文を書いたのでこのような結果になったものと想像される。

そうした「想像」をも根拠にして相馬氏は「太宰の場合は」と氏としての結論をこう下している。<「担保」を下敷きにした以上当然ダーモンとすべきであったのを、シルレルが最初メロス名を使ったことを古伝説との関係から知り、「走れメロス」としたものと思われる。>と。

以上が、わたくしの目の前にある問題の概要である。

4

この議論の弱点、というより以上に、問題の発端にあるものは、議論の根拠を、太宰が参看したと思われるテキストに拠っていないという点である。「翻訳」に問題があるということは、現に、昭和34年に出版され、現在も広く読まれている（香川大学図書館にも架蔵されて愛読されている）テキストである手塚訳が、元来、1連7行全20連140行である詩が、16連131行（4番目の連が5行になっている）しかなく、途中が省略されて訳出してある事実にも現れている。

そこで、（太宰がドイツ語の原典で読んだという可能性は別にして）「走れメロス」が発表された昭和15年5月以前に公刊された翻訳を探して、まず国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』を見ると、詩が訳されているものとしては、次の2種がある。

A, シラー詩集 小栗孝則訳 改造文庫 昭5。

B, 新編シラー詩抄 小栗孝則訳 改造文庫 昭12。

このAには、「Die Bürgschaft」は訳出されていない。ところがBに出ている訳は、上の問題を一挙に氷解する訳文と思われる。そこでその全体を写してみる。

人 質 譚 詩

暴君ディオニスのところに

メロスは短剣をふところにして忍びよった

警吏は彼を捕縛した

「この短剣でなにをするつもりか？ 言へ！」

陰悪な顔をして暴君は問ひつめた
「町を暴君の手から救ふのだ！」
「磔になってから後悔するな」——

「私は」と彼は言った「死ぬ覚悟である
命乞ひなどは決してしない
ただ情けをかけたつもりなら
三日間の日限をあたへてほしい
妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ
その代り友達を人質として置いてをこう
私が逃げたら、彼を絞め殺してくれ」

それを聞きながら王は残虐な気持で北叟笑んだ
そして少しのあひだ考へてから言った
「よし、三日間の日限をおまへにやらう
しかし猶予はきつちりそれ限りだぞ
おまへがわしのところに取り戻しに来ても
彼は身代りとなつて死なねばならぬ
その代り、おまへの罰はゆるしてやらう」

さつそくに彼は友達を訪ねた。「じつは王が
私の所業を憎んで
磔の刑に処すといふのだ
しかし私に三日間の日限をくれた
妹に夫をもたせてやるそのあひだだけ
君は王のところに人質となつてゐてくれ
私が縄をほどきに帰ってくるまで」

無言のまま友を親友は抱きしめた

そして暴君の手から引き取った
その場から彼はすぐに出発した
そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに
急いで妹を夫といつしよにした彼は
気もそぞろに帰路をいそいだ
日限のきれるのを怖れて

途中で雨になつた、いつやむともない豪雨に
山の水源地は氾濫し
小川も河も水かさを増し
やうやく河岸にたどりついたときは
急流に橋は浚はれ
轟々とひびきをあげる激浪が
メリメリと橋桁を跳ねとばしてゐた

彼は茫然と、立ちすくんだ
あちこちと眺めまはし
また声をかぎりに呼びたててみたが
繫舟は残らず浚はれて影なく
目ざす対岸に運んでくれる
渡守りの姿もどこにもない
流れは荒々しく海のやうになつた

彼は河岸にうづくまり、泣きながら
ゼウスに手をあげて哀願した
「ああ、鎮めたまへ、荒れくるふ流れを！
時は刻々に過ぎてゆきます、太陽もすでに
真昼時です、あれが沈んでしまつたら
町に帰ることが出来なかつたら

友達は私のために死ぬのです」

急流はますます激しさを増すばかり
波は波を捲き、煽りたて
時は刻一刻と消えていった
彼は焦燥にかられた、つひに憤然と勇気をふるひ
咆え狂ふ波間に身を躍らせ
満身の力を腕にかけて流れを掻きわけた
神もつひに憐愍を垂れた

やがて岸に這ひあがるや、すぐにまた先きを急いだ
助けをかした神に感謝しながら——
しばらく行くと突然、森の暗がりから
一隊の強盗が躍り出た
行手に立ちふさがり、一撃のもとに打ち殺そうといどみかかった
飛鳥のやうに彼は飛びのき
打ちかかる弓なりの棍棒を避けた

「何をするのだ？」驚いた彼は蒼くなつて叫んだ

「私は命いのちの外にはなにも無い

それも王にくれてやるものだ！」

いきなり彼は近くの人間から棍棒を奪ひ

「不憫だが、友達のためだ！」

と猛然一撃のうちに三人の者を

彼は仆した、後あとの者は逃げ去つた

やがて太陽が灼熱の光りを投げかけた

つひに激しい疲労から

彼はぐつたりと膝を折つた

「おお、慈悲深く私を強盗の手から

さきには急流から神聖な地上に救はれたものよ
今、ここまで来て、疲れきつて動けなくなるとは
愛する友は私のために死なねばならぬのか？」

ふと耳に、潺々と銀の音色ねいろのながれるのが聞こえた
すぐ近くに、さらさらと水音がしてゐる
じつと声を吞んで、耳をすました
近くの岩の裂目から滾々とささやくやうに
冷々とした清水が涌きでてゐる
飛びつくやうに彼は身をかがめた
そして焼けつくからだに元気をとりもどした

太陽は緑の枝をすかして
かがやき映える草原の上に
巨人のやうな木影を亙わたがいてゐる
二人の人が道をゆくのを彼は見た
急ぎ足に追ひぬこうとしたとき
二人の会話が耳にはいつた

「いまごろは彼が礫にかかつてゐるよ」

胸締めつけられる想ひに、宙を飛んで彼は急いだ
彼を息苦しい焦燥がせきたてた
すでに夕映の光りは
遠いシラクスの塔楼のあたりをつつんでゐる
すると向ふからフィロストラトスがやつてきた
家の留守をしてゐた忠僕は
主人をみとめて愕然とした

「お戻りください！ もうお友達をお助けになることは出来ません
いまはご自分のお命が大切です！
ちょうど今、あの方が死刑になるところで
時間いつばいまでお帰りになるのを
今か今かとお待ちになつてゐました
暴君の嘲笑も
あの方の強い信念を變へることは出来ませんでした」――

「どうしても間^まに合はず、彼のために
救ひ手となることが出来なかつたら
私も彼と一緒に死のう
いくら粗暴なタイラントでも
友が友に対する義務を破つたことを、まさか褒めまい
彼は犠牲者を二つ、屠ればよいのだ
愛と誠の力を知るがよいのだ！」

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた
すでに礫の柱が高々と立つのを彼は見た
周囲に群衆が撫然として立つてゐた
縄にかけられて友達は釣りあげられてゆく
猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた
「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ「殺されるのは！
彼を人質とした私はここだ！」

がやがやと群衆は動揺した
二人の者はかたく抱き合つて
悲喜こもごもの気持で泣いた
それを見て、ともに泣かぬ人はなかつた
すぐに王の耳にこの美談は傳へられた

王は人間らしい感動を覚えて
早速に二人を玉座の前に呼びよせた

しばらくはまちまちと二人の者を見つめてゐたが
やがて王は口を開いた。「おまへの望みは叶ったぞ
おまへらはわしの心に勝つたのだ
信実とは決して空虚な妄想ではなかつた
どうかわしをも仲間に入れてくれまいか
どうかわしの願ひを聞き入れて
おまへの仲間の一人にしてほしい」

以上が訳詩の全文であるが、巻末の註解に次の記述がある。

『人質』Die Bürgschaft (1798年作)

この詩はイタリーの伝説中に材料をとつてゐる。ディオニスとはシラーの
変へた名で、本名はディオニジウス Dionysius。イタリーのシシリー島の東
海岸にあるシラクス Syrakus の支配者で、紀元前400年頃の人物。「友達」
とは、伝説ではセリヌンティウス Selinuntius といふ名の男。

「走れメロス」との関係の深さは、一読して明らかであろう。

第一に言えることは、小栗訳「人質」とその註解とには、人名・地名・イタ
リーの伝説に由来すること等、「走れメロス」の材料は全て揃って出て来てい
るということ。太宰は、Hyginus の「Fabeln」を参照することなしに、小栗
訳「人質」とその註解とだけで「走れメロス」を書くことができたはずであ
る。次に、小栗訳「人質」の表現と「走れメロス」の表現に重なる所が多いと
いうこと。それはほとんど数えきれないほどであるが、この2つの作品の関係
を考える上で重要と思える部分を、「走れメロス」の表現からいくつか拾って
みると、捕えられたメロスの王への答え〈市を暴君の手から救ふのだ。〉、増
水した川を前に祈るメロスのことば〈ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！〉

とそれに続く文、作中最も美しい文章の1つ、メロスが疲労のあまりまどろむ
だ時に聞く水の音の描写〈ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。〉以下の
文中の用語、「走れメロス」において最も重要なことば、王の最後のことばの
中の〈信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。〉——これは訳文と同じで
ある——など、太宰は小栗の訳文を大幅に活用していることが判る。

以上の2つの点だけでも、小栗訳「人質」を「走れメロス」の粉本と判断し
てよい十分な根拠と思われる。

5

ところで太宰は、単に小栗訳「人質」を閲読したというだけでなく、この詩
が収録されている改造文庫『新編シラー詩抄』（以下『詩抄』と略称する）を
愛読したと推察しうる言説を、別に残している。

太宰は、昭和15年の前半に、シラーに触れた文章を他に二編書いているので
ある。1つは「心の王者」（「三田新聞」昭和15年1月25日発行）。1つは「諸
君の位置」（「月刊文化学院」昭和15年3月刊）である。

先に発表され、より丹念にシルレルを語っている「心の王者」から、その部
分を引いてみる。

それでは学生本来の姿は、どのやうなものであるか。それに対する答案と
して、私はシルレルの物語詩を一篇、諸君に語りませう。シルレルはもつと
読まなければいけない。

今のこの時局に於ては尚更、大いに読まなければいけない。おほらかな、
強い意志と、努めて明るい高い希望を持ち続ける為にも、諸君は今こそシル
レルを思ひ出し、これを愛読するがよい。シルレルの詩に、「地球の分配」
といふ面白い一篇がありますが、その大意は、凡そ次のやうなものでありま
す。

「受取れよ、この世界を！」と神の父ゼウスは天上から人間に号令した。

「受取れ、これはお前たちのものだ。お前たちにおれば、これを遺産とし
て、永遠の領地として、贈つてやる。さあ、仲好く分け合ふのだ。」その声

を聞き、忽ち先を争つて、手のある限りの者は右往左往、おのれの分前を奪ひ合つた。(後略)

『詩抄』には、「地球の分配」も訳出されている。その第一連と第二連はこうである。

「受取れよ、世界を！」ゼウスは天上から叫んだ
人間に呼びかけた。「受取れ、これはお前たちのものだ
お前たちにおれはこれを遺産とし、永遠の領地として贈つてやる
さあ、仲良く頒けあふのだ」

たちまち先きを争つて、手のある限りの者は馳せ向つた
汲々と老ひも若きも働いた
農民は田畑の収穫に手をのばし
公^{さんだち}達は森林を踏みわけ、獲物を狙つた

これだけでもう、太宰が『詩抄』を共感をもって読んでいたことを言うには充分であろう。「諸君の位置」に引用されているシルレルも「地球の分配」であり、引用された部分の表現も、同じく小栗訳に重なっている。

6

ここでひとまず「まとめ」をすることができるだろう。

一つは、太宰は「走れメロス」の材料として、『新編シラー詩抄』(小栗孝則訳 改造文庫)に載る「人質」を使っている、ということ。この訳詩集だけで「走れメロス」の材料は全て揃っており、これだけで「走れメロス」を書くことができたということ。従って、「走れメロス」の成立のレベルにおいては、あえてヒギンの「寓話」との連続関係を考える必要はない。

もう一つは、昭和15年の前半期、太宰はシルレルに大きな共感を覚えていたが、その共感を生み出したものに小栗孝則の訳詩集があったということである。³⁾

7

先に進む前に、上掲A・Bの改造文庫の関係について明らかにしておきたい。小栗氏はB、すなわち『詩抄』の冒頭に「訳者序」を置き、次のように書いている。

私が以前の『シラー詩集』を訳したのは、算へると十年も前のことになる。その当時はこれでいいつもりでゐた(中略)。しかし今になつてみると、よくもこんな人も無げなことを恥づかしくもなく出来たものだと、驚いてゐる。若さの衝気がさうさせたのだと言へばそれまでだが、実際穴でもあれば這入りたいやうな気持がする。そして旧訳詩集を所持される方に、甚だ勝手な云ひ分だが、それを破棄して戴きたいとさえ思つてゐる。全く『シラー詩集』の改訳はすでに時の問題でなくなり、訳者としての責任上の問題だと考へた。(中略)

こんどの訳詩集は旧訳を改竄したのでなく、全くの新訳、改編なので、表題も『新編シラー詩抄』と改めた。(後略)

Aには「地球の分配」が「地球の分割」の訳題で訳出されているが、そこでは第1行目に出る「Zeus」が「ツオイス」となっていたりする。

翻訳のテキストについては、<旧訳書と同じく、ベラーマン編纂の『シラー詩集』Schillers Gedichte. Herg. von L. Bellermann. Bibliographisches Institut. Leipzig u. Wienを用ひ、参考書としてデュンツェルの『シラーの抒情詩解義』Schillers Lyrische Gedichte. Erläutert von H. Düntzer. E. Wartigs Verlag, Leipzig を使用した。>とある。従つて Hanser 社版全集のテキストでものを言うことは、今の場合は適切ではないのだが、その解題を見ると L. Bellermann の仕事をも参看しているので、それに拠つた。

ちなみに Hanser 社版第一巻の Anhang (附録)には次の注記がある。

Die Bürgschaft—Beendet am 30. 8. 1798. Erstdruck : Musenalmanach

1799.—Nach den Fabeln des Hyginus, Amsterdam 1670.—Im Erstdruck heißt Damon »Möros« wie in der Quelle.—Für die Prachtausgabe »Damon und Pythias« als Titel vorgesehen.

ダモンとメロスの名前の入れ代りについては、小栗氏は『詩抄』のどこにも書いていない。

8

改造文庫『新編シラー詩抄』の繙読から太宰が「心の王者」「諸君の位置」「走れメロス」などの文章を書いたことを思いつつ『詩抄』を通読すると、多少の感想が湧く。次にそれを記して本稿のまとめに代えたい。

第一には、太宰が関心を示した個所をめぐってである。

『詩抄』の構成について小栗氏は「訳者序」にこう書いている。

内容の編纂も、旧訳書のやうな著作年代順による配列を排し、抜萃した詩二十七篇（略）を二部門に分けてみた。第一編には「理想と人生」といふ総称の下に、所謂「瞑想的抒情詩」を中心にして十五篇の詩を収めた。第二編には「ポリクラテスの指輪」といふ総称の下に、所謂「叙事的抒情詩」を中心にして十二篇の詩を収めた。この分類と配列は私自身の趣向によるもので、敢て言へば、全体の上に一つの調子を整へ、これによつて作品に対する理解を幾分でも補へるやうに、配列も著作年代順位に依らなかつた。

その第二編「ポリクラテスの指輪」にまとめられた12編の詩の題名は——ヘクトールの告別、アルプスの狩人、カッサンドラ、ヘロとレアンデル 譚詩、タウヒエル（潜水者）、ポリクラテスの指輪 譚詩、人質 譚詩、ハプスブルク伯爵、騎士トッゲンブルク 譚詩、イビクスの鶴 譚詩、手袋 物語、地球の分配、である。「人質」も「地球の分配」もこの「叙事的抒情詩」の中にあることになる。逆に言えば、太宰の関心は「叙事的抒情詩」に集まっているということになる。もちろん2編という数であるから、何か確かなことを言う根拠にはなりに

くいが、太宰がシルレルのアンソロジー 1 冊を読み、共感し、太宰自身の思いを託すことばをそこに捨てるに際し、「叙事的」なる作物から選んでいるということは、記憶したい事実のように思う。(それは、太宰の小説家魂とでもいうようなものを喚起させられるからであるが、その事については拙稿〈「HUMAN LOST」論〉(「解釈と鑑賞」548, 1977年12月所載)で考えているので参照いただきたい。)

第二として、太宰の関心の示し方のことがある。

「ポリクラテスの指輪」の12編を Hanser 社版全集と対応させると、その中の10編までが「Balladen und Romanzen」としてまとめられている12編中に含まれている。ここに入っていないのは、1編は「ヘクトールの告別」で全集では「Lieder」の項に、もう1編は「地球の分配」で、これは「Gedicht 1788~1805」の項に置かれている。ちなみに「Balladen und Romanzen」の他の2編は「Der Gangnach dem Eisenhammer」と「Der Kampf mit dem Drachen」。小栗氏はこれを訳出していない。すなわち小栗氏は「叙事的抒情詩」と名付けつつ、シルレルのバラッドとロマンツェのほとんどを訳出していると言える。また、トロイ戦争に材料を取った「ヘクトールの告別」、ギリシャ神話に題材を借りた「地球の分配」を、その内容から考えて、小栗氏が「叙事的抒情詩」の区分けに入れたことは、あえて異を唱えるほどのことはないであろう。そのような作品群である第2編から太宰が選んだ話材が「人質」と「地球の分配」であったわけである。

第2篇には、太宰が捨ってもおかしくないという気がする題材が他にもいろいろある。〈「小羊の番をするのはいやか? / 小羊は、ほんとに無邪気で可愛いよ / 草原で花を喰べあったり / 小川のふちで遊んだり」—— / 「お母さん、お母さん、行かせてよ / 山の上で狩をするんだ」——〉の第1連から始まり、山の上の狩に出かけたがる子どもの心をうたう「アルプスの狩人」。〈「すべてが喜びに胸をひらいてゐる / すべての心は幸福に酔つてゐる / 年老ひた両親は希望に満ち / 妹は着飾つてゐる / 私ただ一人が悲しみに泣かなければならないのだ / 私には甘い迷いは消え / この城壁に今にも迫ってくる没落が / 手に取るやうに見えるのだ〉(第4連) と、運命を明らかに見通しながら、その予言が人々

の決して信ずるところとならない苦哀を歌う「カッサンドラ」。「渦巻く怒濤」に王が投げ入れた盃を一度は取って来るが、再度投げ入れられた盃を取りに潜り返って来なかった若者を歌う「タウヒェル（潜水者）」。

太宰は結局、それらから自分の作品を創ることをしなかった。残ったのは「走れメロス」であり「心の王者」であり「諸君の位置」であった。「走れメロス」は、「人を信ずる事が出来ぬ」という国王と約束をしたメロスが、「人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走ってるのだ」と走り通し、その結果国王ディオニスに「信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。」と言わしめる道筋を背骨とする作品である。「地球の分配」というのは、最後に<「お前はいつたいどこにをつた？ みんなが地球を分けあつてゐるとき>とゼウスに言われ、<「あなたのそばに／眼はあなたの顔にそそがれて／耳は天上の音楽に聴きほれてゐました／この心をお許し下さい、あなたの光りに／陶然と酔つて、地上のことを忘れてゐたのを！>と答える詩人を歌う詩であるが、「心の王者」「諸君の位置」で太宰は<学生本来の姿とは、即ち此の神の寵児、此の詩人の姿に違いないのであります>と説いている。

そうした作品を書いた昭和15年前半とは太宰にとってどういう時期であったか。前年昭和14年の1月に石原美知子と結婚し、甲府での新婚生活を経て、9月東京府下三鷹に転居、いわゆる「中期」の安定した創作活動が順調に展開しだした時期に当たる。その時にシルレルに共感しつつ、そこから題材を選んで語るに「信実」の力と、「詩人の幸福」とを称揚することであったことは、太宰の心の在りどころとその傾きを知る上で、やはり記憶したい事実のように思う。⁴⁾(この事に関しては拙稿<「黄村先生」断想—その小説作法をめぐって—>〔「信州白樺」No. 51・52合併号、太宰治特集、1982年10月〕で、細かく考察している。参照していただければ幸甚である。)

小栗訳「人質」の本文と「走れメロス」本文との厳密な対比考究の作業は、当然これから試みられねばならぬ課題であるが、その問題の要点は、原典ある

いは他の訳によって、文献3の井上論文以下、上記先行論文以外でも様々に論じられてきている。わたくしとしては、もう少し別のテーマの中にこれを据えて考えてみたい意図もあり、別稿を期したい。ただ、一言つけ加えるなら、「走れメロス」は、「人質」に「物語の論理」（リアリティと言ってもよいが）を整えるという配慮がなされているだけで、ほとんど、説話における「再話」に近いものであるとの私見を記しておきたい。

〔1983・6・30〕

《注》

- 1) 「あとがき」に、この論文は最初「日本近代文学」第23集（昭51・10）に「太宰治『走れメロス』試論」の題名で発表されたものを、新資料の入手などがあり、補筆訂正したもの、とある。
- 2) 文献7の小野論文に古伝説の原典はギリシヤ(?)の「デーモンとフィンテヤス」の友情譚で、太宰は高等小学校1年（大正11年4月～同12年3月）の時、国定教科書『高等小学読本巻一』の第三課「真の知己」のところで学習したことがあったはずだ>との考察が述べられていることを、相馬氏が引用紹介している。
- 3) 従って文献3の井上論文における<太宰がシラーとむすびつくのは、内的な必然性というよりは、いわば、ほんの偶然のものだからである。たまたま、ある題材を、太宰が、シラーのものから借りたというにすぎない。>との意見は、否定されねばならない。
- 4) ここのわたくしの考えを補足する。「走れメロス」は、小野論文の言うように小学校時代に学習した国語教材との関連を指摘されたり、榎一雄がいわゆる「熱海事件」との結びつきで読めてしまうことを述べたりして、いろいろな読まれ方が知られている。そうした読み方の一つとして、昭和15年前半期の太宰自身の作家としての問題意識の流れの中で大きな声をあげている作品と言えるという点を強調したのである。

付記 シラー全集及び中西論文の閲読に際し、森本国臣・高木文夫両氏のお世話になった。記して感謝の意を表したい。

付記2 ベラーマン編集ではない刊本で、主人公が「Möros」となっているテキストを見たので付記する。刊行年の記載はなく、ライプツヒヒで出ている「Minerva」と称する、さし絵入り6巻本シラー全集の第1巻に収められたテキストが、それである。この詩のテキストの成立にどんな経緯があるのか、どなたかご教示くだされば大変ありがたい。